



コイする
ニブラ

冬。

マジで寂しいクリスマスを過ごすことになった。

高校時代の同級生と一緒に始めたコンカツがうまくいかず、「こーなったら独り身同士、リトルワールドでも行くか！」ワハハ、と、カクテル 10 種飲み比べたのが 10 日前。前売券を買ってスタンバってたのが昨日。

「急遽会社の後輩♂と食事することになったから、明日キャンセル〜」て、このメールがきたのも、昨日。

そして、今日。

ひとり、リトルワールド行きのバスに乗り、こーしてケータイいじ
くってる。アタシ、美空。昭和生まれ。31才。「ホンモノのコ
イ」に出会いたい。と、思っていた。

その願いが通じたのかしら。

不意に耳に届いた。「コイなら、池に」言葉の主は後ろの座席に
座っていた老夫婦だった。

おもわず振り返ったアタシに、老夫婦は瞬間戸惑い、すぐにニコッ
(^-^)

アタシもつられてニコッ(^-^)

挨拶を二言三言交わしたら、また元通り。何のことはない。老夫
婦はマニアックにリトルワールドの配置について話してた。

「あそこの鯉の近くはインディオの村だった」「違うわよ、韓国の農家よ」「韓国は沖縄の近くだった、お前はいつも間違っとる」「間違ってるわよ、おじいさんボケてきたのよ」

老いてなおのその記憶力に脱帽、しつつ、アタシは自分に呆れ返る。

鯉と恋 なんてダジャレ。

---*---*---*---*---*---

だけど池に来た。

なるほど、韓国もインディオも確かに近く、あの夫婦はお互い正しい。

鯉の餌を買い、池に投げるとぬらぬらした鱗を光らせて、たくさんの鯉が集まってきた。

うわあ、気持ち悪い。

そう思って餌を一気に全部投げ、池から離れようとした。

その時。

「気持ち悪いよなあ」

と、横で声がする。

見れば、隣に鯉がいる。

コートとブーツとマリナーズのキャップに身を包んだ、鯉がいる。

比喩ではない。

ぬらぬらした鯉。

「気持ち悪いけどさあ、鯉なんだもん」

高倉健のように渋い声の鯉は、ぎよろとした目をこちらに傾けた。

アタシは驚き、卒倒したかったのに、出来なかった。

鯉はキャップと接近した口をパクパクさせながら。アタシを向いた。

ブーツに挿さっているかのような鯉は、キャップかぶってんのにコートの下は鱗のみ。

真っ白な腹を見せて、錦鯉でもないから黒光りした鮎のような胸ビレをさしだして、

「よっ、俺、鯉なんだけど。君可愛いね。今ひとり？良かったら一緒に餌食わない？」

ナンパされた。

---*---*---*---*---*---

餌は嫌だと言ったら、じゃあ君の好きなの、と言うので、イタリアコーナーでアイスを食べることになった。

鯉の奴、生意気に財布の中身を確認する。

「おっけ◎今日余裕だわ、ホテルだって行けちゃうよ」

「鯉なのに？」

「興味ある？今から行っちゃう？」

一瞬、鯉とラブシーンを展開するのを想像した。 極めて猟奇的。

「鯉コクにしてやるうか...」

と言うと鯉は

「S ? Sなの? 楽しみい」とはしゃぎ、道端に倒れこんで尻尾（ブーツ）をバタつかせた。

気持ち悪いので蹴っ飛ばして逃げた。

干涸びて、死ぬ。

---*---*---*---*---*---

鯉がおごると言うのでワニ肉を食べることに。

自販機でミネラルウォーターを買って頭から被ったのには驚いたが、なんかそれでいいらしい。 しばらく歩くと鯉がクシャミをする。

寒空の下、水を被ったから風邪をひいたらしい。

可哀想になってアタシのマフラーを貸してあげた。魚臭くなるけど、仕方ない。

「池は平気なのに風邪ひくんだね」

「水質だなあ、水清ければ魚住まず、だよ」

鯉のくせに知的だ。

少しときめく。

こんな感覚は久しぶり。

手をつないでもいいかな、なんて気がしてきて、鯉のコートをつかんでみる。

すると

「きゃっ」

鯉はアタシを胸ビレで抱き寄せると、全身で体当たりしてきた。アタシは近くの木に押しつけられた。

どーやら興奮しているらしく、鯉はギラギラしたエラを大きく動かした。

「ごめん、**キス**したい」

そう言うと、無理矢理に頭部を曲げてパクパクさせていた口をアタシの顔にくっつけた。

泥臭い。

「泥臭いよ、やめろよ、魚類、やめろよ」と、抵抗するんだけど、意外と身体が重い。そして全身がぬるぬるしているので、抵抗しようとしても手が滑る。

「だって、パクパク、美空って、パクパク、マジ可愛いんだもん」
興奮してさらにエラを動かす鯉を見ていると、なんだか愛しくなってきた。

鯉とのラブシーン、ウン、いいかも。

そんな気がしてきて、鯉の口を指で撫でた。

「バカ、キスはこうするのよ」

アタシは鯉の口に唇を押し当てる。

鯉はエラをパクパクさせた。

そのキスは、生まれてはじめて感じた、最高のキスだった。

まるで鯉とアタシが溶け合うような、身体全て委ねるような。

「気持ちイイ」

と、長く瞑っていた目を開けてみれば、どーやらアタシは鯉の腹の中にいる。

---*---*---*---*---*---

遠くから声がする。『美空ー？美空ー？』 その声は空気を振動させて響いてくるのに、なぜか遠く感じる。

『美空、俺、またやっちゃったのかな…グス、グス』

多分鯉が泣いているのだ。

またってことは、前にもやったことがあるってこと？

アタシは深呼吸をして周りをじっと見てみる。

真っ暗な空間に少しずつ目が慣れてきて、ゴツゴツとした内臓のヒダがよく見える。

前後を見ると長い長いトンネルのように曲がりくねって真っ暗になって、消えている。

たまーに点滅する電灯のように光が差すのは、鯉が口をパクパクするからだろう。

胃酸で溶けちゃったりするんだらうか。

アタシ、もしかして騙されたのかな。

鯉ってば、最初っからアタシのこと食糧だと思ってたのかな。

そう考えたら涙が出てきた。

ヒック、ヒック、と、喉をしゃくりあげるけど、泣いていたって仕方ないってことはよくわかる。

どっちが前でどっちが後ろだか、皆目検討つかないけれど、溶けずに歩けばここから出られるんだろう。

真っ暗でグニャリグニャリと動く身体の中は、とっても歩きづらい。おまけにじめじめしているし、泥臭いし、アイスのおいまでする。

しばらく歩くと、前から明るく開いて見えた。

出口だ！

喜んで走ったら、**滑って転んだ**。

タッタッタ・・・と足音がして、誰かが駆けてくる。

「大丈夫ですか？」

手を差しのべられて顔をあげると、そこにはギャルが一人いた。

---*---*---*---*---*---

クルクルに髪の毛を巻いた金髪の女の子は、超ミニのスカートからパンツをチラチラ見せながら「あなたもジュンちゃんとキスしたんだあ」と、少し笑って言った。

「あなたもってことは、あなたも？」 アタシが尋ねると、ギャルは「うふふ」と笑った。

「キスどころか、セックスもしてたもんねー」と、なぜか自慢げ。

鯉とのセックスなんてちっともうらやましくない、ましてこの鯉（ジュンくんというのか）は人食いじゃない。

なのになんとなく嫉妬して

「ふうーん、ヤリトモだったの？」

と聞いた。

ギャルは怒った。

「違うんだから！ジュンくんはそんな軽い鯉じゃないんだから！ジュンくん（鯉）とアタシ、マジだったんだから」

そう怒鳴ると、突然その場にへたり込んで「ふえーん」と泣き始めた。

語るところによると、お父さんが釣り上げた鯉に恋をしたギャルは寝る間も惜しんでジュンくん（鯉）をかわいがり、餌も特上のものを与えていたらずいぶん大きくなって、次第にオシャレも身につけて、

「俺、ジャニーズになれっかな」

と言い出したらしい。

「いや、ジャニーズは無理だよ」

と、さすがにギャルも否定したらしいが、ジュンくん（鯉）は止まらなかった。

「俺、イケる。絶対イケる。玉木宏よりは俺のほうがカッコいいね」

そう言って、ジュンくん（鯉）は毎日遊びに行くようになってしまったのだという。

ギャルは泣いた。

毎日泣いた。

泣いているとジュンくん（鯉）は優しく抱いてくれたのだという。

「俺、100人とセックスすれば人間になれるからさ。そしたら、リサ（ギャル）のこと、一日中愛してやっから」

そうしてギャルとセックスしまくっていたらしいのだが、ある日、勢い余ってギャルを飲み込んでしまったらしい。

…話を聞き終わったアタシはついつい言った。

「それって、体よく片付けられたってことじゃん」

またまたギャルは激怒した。

激怒してアタシの髪の毛をつかみ、投げ飛ばした。

何はともあれ、食われてもなお鯉を愛するリサ（ギャル）の想いは、
どうやらホンモノだということだ。アタシはどうだ。

はて。

---*---*---*---*---*---

リサから離れて、また一人で歩いた。

ヒダにこびりついているものは、きっとウンチになるものだろう。

アタシはお尻に近づいている。

どれくらい歩いたかわからないが、アタシはお腹がすいていた。

だってワニ肉を食べるつもりで食べてないのだ。

もしもここから出られたら、お腹いっぱいワニ肉を食べよう。

ジュンくん（鯉）と二人で食べよう。

そう考えて、首をかしげる。

あれえ？アタシ、鯉のこと、好きだったのか？

アタシを食ってしまった鯉なんだけどな。

変だな。

首をかしげながら歩いていると、前がぎっしり、何かでつまっている。

きっとウンチの塊だ！

あれにまざれば、アタシはここから出られるのだ。

そう思うとスピードが上がって、アタシは走った。

滑って**転んだ**。

「大丈夫ですか」

手をさしのべられて顔をあげると、そこには熟女が一人いた。

---*---*---*---*---*---

しっとりした黒髪をひとつに結って、膝下丈のスカートにブラウスをしまっている妙齡の女は、アタシの頭を撫でて

「まあ、**まだ若い**のに、来てしまったのね」

と抱きしめてくれた。

アタシは急に不安や恐怖がこみあげてきて、それをすべてこの人にぶつけたくなって「ウーン」と泣いた。

熟女はアタシを抱きしめて、ウンチのこびりついたヒダをコツンとたたき

「ジュン（鯉）ってば、馬鹿ね。アタシだけじゃ満足できないんだわ」

と、いとおしそうに身体を壁に預ける。

そして壁にキスをし、

「うふふ、馬鹿みたいでしょう。いい年をしたお婆さんがって思うでしょう」

と、自嘲する。

熟女（百合子）が語るに、ナンパ行為を繰り返していたジュン（鯉）に、ある日陶芸センターで呼び止められて、なんかうまいこと言われて関係をもち、夫も子どももあるというのに、ジュン（鯉）に溺れてしまったのだという。

「**鯉**だけに、**恋**に溺れたのね」

と、駄洒落のつもりだったらしいのだが、アタシは笑えなかった。

つうか臭いし。

ジュン（鯉）は魚類なだけあってたくましく、特に腰（がどこかはわからない）のバネが素晴らしかったのだという。

こと細かに語られて、なんだかアタシもフンフンと興奮してきて、「あ～、アタシもジュン（鯉）に抱かれたかった」なんて言ってしまった。

そう言ったとき、熟女は「あら、あなたは、してなかったの？ あら、そう？ ふふふ」と、馬鹿にした顔で言うのでむかついて、「ジュン（鯉）は、アタシには本気だったのよ。あんたなんかお情けでやってやってたに決まってるじゃん」と言ってやると、熟女はアタシの腹に鋭いヒールキックをかました。

グホッ、という声とともにアタシは吹っ飛ばされた。

--*--*--*--*--*--

それから少し歩くと、また**滑って転**んだ。

今度手をさしのべてくれたのは、なんと男だった。

グラスンをかけた茶髪の若い男は

「こんなブスに手を出しやがって」と泣いた。

突然のことでアタシは開いた口がふさがらない。

茶髪の男（裕太）は、最初はジュン（鯉）のナンパ仲間だったが、次第にその背ビレと尾ビレに惹かれていって、ついには土下座して関係をもつようになったのだという。

「アイツ、俺なんか好きじゃないって言いながら、抱いてくれたんだ。特にキスが良かった。どうせ結ばれない恋なら、このまま一つになりたいって思ったんだ」

裕太（茶髪）は、他の誰よりもよく泣いた。

「俺はアイツの、女を選ぶ目も惚れ込んでいたのに、よりによってこんな女」

またアタシを侮辱するので

「うるせえホモ。ジュン（鯉）はアタシの内面を見てくれたんだよ、バーカバーカ」

とあっかんべーをすると

「おとなしくしてりゃ、このブス」
と、唐突に脇腹をナイフで刺された。

傷は深くなかったが血が出た。

アタシは血を垂らしながら歩いた。

アタシの血は、ジュン（鯉）の内臓をうごめく無数の毛細血管にしみこんでいくようだった。

それはまるで、アタシがジュン（鯉）と同化するかのようだった。

---*---*---*---*---*---

その後、23人の老若男女に会っただけで、みんなジュン（鯉）のことが好きだと言った。

アタシはその23人に嫉妬して、アタシのほうがジュン（鯉）のことを好きだし、ジュン（鯉）もアタシのことが好きなんだと言ってやった。

だけどアタシは出口を求めて歩いていた。

ウンコをかき分け、歩いていた。

百合子もリサも裕太も拓也も梓も京子もマリーもヤンソンも、みんなみんな、ここにとどまることを望む一方で。

アタシは、出口を求めて歩いていた。

伸吾も一恵もカルロスもセリーヌもホパカカマスも梅代も、みんなみんな、ウンチをよけて、ジュン（鯉）の一部になることを望むというのに、アタシは、出口を求めて歩いていた。

脇腹の出血はいつしか止まっていた。

アタシと鯉の同化も終わっていた。

アタシは、誰よりもジュン（鯉）のことを好きなつもりになっただけだ。

それでも出口を求めた。

そして、

アタシは

池

の中に落とされた。

ジュン（鯉）の肛門が、離れていく。

アタシは手を伸ばした。届かなかった。

ジュン（鯉）は用を済ませたら池からあがったようだった。

アタシはしばし、池に浮きぬ沈みぬ、**一人で**、クロールした。

ジュン（鯉）の背中を追っかけたけど、もういなかった。
アタシは、ぽつんと、立っていた。

--*--*--*--*--*--

見渡すと、そこはリトルワールドじゃなかった。
アタシが出てきたのは、どうやら明治村の池だった。
明治村は入村料が高いのに、タダで入れたことになる。
ラッキーと少し思った。
濡れたまましばらく歩いてて、クシャミが出た。
マフラーを貸したまんまだ。

ジャケットのポケットから携帯電話を出すと、あれだけ濡れたはずなのに無事だった。

一緒に遊ぶはずだった友達から、メールが入ってる。

「後輩と結婚を前提に付き合うことになりました～♪美空もがんば～」

がんばじゃねえよ、マジかよ、おめでとうだよ、
こんちくしょう。

「おめでとう★」

までメールを作って、なんだかその先が続かなかった。

・・・。

おめでとう。アタシもがんばらなくちゃ。おめでとう。負けてらんないぞ。おめでとう。アタシ、がんばるのかな。アタシ、がんばるのかな。リサや百合子や裕太やその他諸々の人々のように、全身全霊かけて、恋、出来るのかな。

・・・・・・・・・・。

舌の上に違和感があってベロを出してみた。

舌には鱗が一枚はりついていた。

切ないような苦しいような悲しいような。

携帯電話を持ったまま、アタシはぼんやり立っていた。

そうしてメールの続きを作る。

「おめでとう★アタシも、頑張るぜ」

頑張るぜ。

ホンモノかどうか、わかんないけど、頑張るぜ。

なんつうか、ウンチにまみれながら、頑張るんだぜ。

Fin.

初出：ChildLike No.8(2009/8/16)

Update：2011/3/4

Special respect for ケータイ小説「赤い糸」

<http://tsunakan.info/>